

複言語・複文化主義および表象文化論的立場から見る セドリック・クラピッシュの三部作[†]

辻野 稔哉*

秋田大学教育文化学部

現在、大学の教育現場において「国際文化理解」や「国際理解教育」といったことがさかんに取り上げられ、その理論的な観点や各種のデータ、そして現場での実践例等が授業においても議論される。本稿執筆者は、その中でも複言語・複文化主義的態度や実践面に注目し、いくつかの授業でそれらを扱って来た。しかし、大学の中だけでは、なかなかこうした問題を身近な問題として実感することが難しいのも事実である。そこで、現代ヨーロッパの若者たちの群像劇である「セドリック・クラピッシュの三部作¹」を通して、国際的な相互理解の問題に主体的な関心を持ってもらおうと考えた。同時に、これらの作品は、その物語に描かれる内容だけでなく、映画としての構成や形式の面においても興味深い特色を持っている。従って、単に映画を国際理解教育の「教材」と見做すのではなく、作品の理解を通して様々な観点が浮上して来ることの実践として、これらの解釈を試みた。

キーワード：相互文化コミュニケーション、複言語、複文化主義、グローバリゼーション、アイデンティティ、ジェンダー、EU、映画研究、表象文化

はじめに

2002年、フランスの映画監督セドリック・クラピッシュは『スパニッシュアパートメント *L'auberge espagnole*』というタイトルを持つ映画を発表する。これは、一人のフランス人青年が、スペインはバルセロナに留学し、ルームメイトたちとの様々な経験を経て成長して行くという物語である。主人公グザヴィエ・ルソーを演じるのはロマン・デュリスで、当時28歳だったが、この作品が人気を博したことを機に、一気にフランスの若手俳優としてブレイクした。その他にも、セシル・ド・フランスやケリー・ライリーといった女優陣がこの作品をきっかけに、ヨーロッパのみならずハリウッドでも活躍してい

る。また、前年の2001年に発表された『アメリ』で一躍有名となったオドレイ・トトゥもグザヴィエのガールフレンドとして登場しており、『スパニッシュ・アパートメント』は、錚々たるメンバーによる青春群像映画として人々の記憶に残る映画となった。

ところで、この映画のタイトルにもなっている「アパート」は、ドイツ、イタリア、イギリス、デンマーク、スペインという国々を出身地にもつ若者たちによってシェアされており、そこにフランス人のグザヴィエ、さらにベルギーのイザベルが加わって7カ国の若者たちが共に暮らすことになる。1993年に発足した欧州連合（EU）に単一通貨ユーロが導入されたのが1999年であり、実際にユーロ紙幣や貨幣の流通が開始されたのが、この映画が作られた2002年であった。そうしたヨーロッパの状況を反映して、グザヴィエはスペインに「経済学」と「スペイン語」を学びに来ており、物語の内容も「In varietate concordia（多様性における統一）」を標

2017年11月27日受理

[†]A Study of the film trilogy of Cédric Klapisch: plurilingualism, pluriculturalism and metarepresentation in "Xavier's adventures"

*Toshiya TSUJINO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

語として掲げている欧州連合の在り方を強く意識したものとなっている。

本稿執筆者は、この映画を、無論現在の状況とは様々な点で異なっているとは言え²、上記標語の基本的な理念を具体的な形として捉えることが出来る作品と考え、様々な授業において紹介して来た。さらに言えば、複文化・複言語主義の具体例としてこの映画を捉えることができると考える³。そうした考えは、制作から15年が経過した今も変わらないが、一方でこの映画には続編があることも忘れてはならない。2005年に『ロシアン・ドールズ*Les Poupées russes*』が、制作され、さらに2013年に『ニューヨークの巴里夫(パリジャン) *Casse-tête choinois*』が作られ、三部作として完結している。それぞれタイトルが示すように、ロシア、アメリカ合衆国へと舞台が移って行き、グザヴィエと彼を取り巻く若者たちのその後が描かれている。そこで今回、これらをまとめて課外の連続講義として取り上げ、それらの内容が語るグザヴィエの物語とそれぞれの映画としての在り方を検討することにした⁴。残念ながら、参加学生が数名に留まったため、授業に対する反応の統計的な報告は見送らざるを得なかったが、「国際文化理解」「国際理解教育」「映像文化論」といった執筆者担当の複数の授業の観点からこれらを捉え、今後の授業に反映する良い機会となった。以下にこれを報告する。

1: 『スパニッシュ・アパートメント』

あらすじ

25歳のフランス人大学生グザヴィエは、父の友人で経済金融関係の官僚であるペランの勧めで、経済を学ぶ為にバルセロナに留学することになる。そして、彼が見つけたのがイギリス人ウェンディ、イタリア人アレッシンドロ、ドイツ人トビアス、デンマーク人ラース、スペイン人ソレダの学生5人がシェアして暮らしているアパートであった。グザヴィエのあとにベルギー人イザベルが加わり、最後にはウェンディの弟ウィリアムも同居し、8人の寄り合い所帯となる。グザヴィエは留学中、夫あるフランス人女性と不倫をしたり、パリでの恋人マルティーヌと別れたりと不安定だが刺激的な生活を送る。他の仲間もそれぞれが異なる事情を抱えているが、互いに影響を与えあい、時にぶつかりつつ、助け合いながら成長して行く。やがて1年が過ぎ、グザヴィエは

帰国する。彼は、バルセロナの思い出を胸に、人生の決断をすることになる。

1-1: 複文化・複言語主義

繰り返しになるが、この映画の舞台はバルセロナである。この都市はカタルーニャ州の州都であり、カタルーニャ語が話されている。映画の中で、カタルーニャ語で授業をする教員に、イザベルがカステリーリャ語で話すよう求めるが、教員がそれを拒否する場面がある。グザヴィエたちはエラスムス・プログラム(欧州交換留学プログラム)によって他国からやってきた若者なので、本国で学習した「スペイン語」は「国家の公用語である⁵」カステリーリャ語であり、カタルーニャ語はなじみの無い言葉ということになる。上記のシーンの直後に、地元バルセロナ在住と思われる学生たちが、グザヴィエとイザベルにこの件について話をするシーンが入る。特にガンビアにオリジンを持つ黒人の学生が、自分のアイデンティティはアフリカ系であることとカタルーニャ人であることの両方だ、アイデンティティは単一とは限らない、と話す場面は印象的である。スペイン一国の中でも、公用語として知る義務のあるカステリーリャ語とその他のカタルーニャ語やガリシア語さらにバスク語などが混在しているのだが、本作品では、カタルーニャ語に象徴される多様性の尊重という問題が前面に出ている。面白いのは、そのまたすぐ次のシーンで、イザベルが一国の中で二言語を使い分けるのはやはり面倒だ、とこぼす場面である。グザヴィエが、(イザベルの出身国である)ベルギーでも二言語が使われていると指摘すると、自分はフラマン語(オランダ語系)は知らないからフランドルではフランス人のふりをし、ワロン語(フランス語系)だけでやっていける、といった話をする。すなわちこの映画では、多言語状態のスペインやベルギーの状況を描き出しつつ、複数のアイデンティティ尊重の立場から個人のスキルとして複数の言語を学んで行く複言語主義が擁護されている。

事実、グザヴィエたちの暮らすアパートでは、基本的に彼らは英語でコミュニケーションを図るが、ソレダはスペイン人なのでスペイン語で話す場合もあり、ラースもデンマーク人だがパリ滞在の経験があり、フランス語を少し話す。またこのアパートに一つしか無い固定電話の横には、各国語で簡単な応

答表現が張り出してある。映画中では、ウエンディがグザヴィエの母親からの電話を受ける場面がある。彼女は張り紙に書かれているフランス語をただただしく伝えるが、なかなか上手く伝わらず、英語とフランス語でしどろもどろになる。こうした場面にも、英語を唯一の共通語として良しとするのではなく、ケースバイケースで言語を使い分ける複言語主義の考え方が反映されている。加えて言うならば、グザヴィエはフランス人の恋人と別れて、多国籍同居住宅の世界を選ぶのであり、フランス語だけの世界を飛び出したのである。

1-2 : LGBT

本作品のみならず三部作の主人公はフランス人グザヴィエであるが、準主人公役としてベルギー人のイザベルが重要な役割を演じている。すでに述べたように、彼女はフランス語（ワロン語）の話者であるため、グザヴィエの良い相談役でもあるのだが、とりわけイザベルがレズビアンであるという点が一貫して強調されている。しかも、それが秘匿されるような描かれ方は一切されておらず、イザベルは堂々と女性と付き合い、男女間と同じように恋愛問題における悩みやトラブルを乗り越えながら生きて行く。最初は驚くグザヴィエであるが、すぐにこだわることなく、イザベルとの友情関係を強くして行く。

性的少数者の描写は、例えば、本作制作のわずか数年前の1999年にPACS (Pacte Civil de Solidarité) が制定されたことなども影響していると考えられる。PACSは、一般に民事連帯契約と訳されるが、厳しい規程のある婚姻より規制が緩和されており、同棲・事実婚などよりは相続問題などにおいて優遇措置が受けられる点で、フランスでは広く受け入れられている。また、このPACSは、男女だけでなく同性のカップルにも適用される。本作には、いち早くこうした法制度を整備したフランスの価値観が表現されていると考えられる。さらに、内容をやや先取りすることになるが、このイザベルという登場人物はレズビアンということに留まらず、グザヴィエの生涯にとって重要な存在となり、この第一作目においてはそれほど大きな問題には見えない「家族」という問題系を、三部作にもたらすことになる。この点については、次節以降で触れて行く。

1-3 : 創作行為 (書くこと、物語ること)

次に、物語内容ではなく、映画としての構成面、形式面から見た本作の特徴とそれが観客、視聴者にもたらす効果をおさえておきたい。

本作品のファーストショットは、飛行機が離陸しようとする所から始まる。勿論グザヴィエがスペインに旅立つ所を表しているが、突然画面がストップしてグザヴィエ本人のナレーションが入り、そこからは留学に至る経緯が語られる。ここでは、ナレーション＝語りの現在がどの時点にあるのか観客には不明だが、少なくとも「旅立ちのシーン」が回想であることは明らかとなる。グザヴィエが留学を決意し、その手続きを整えるくだりは、早送りのモーションコントロールで表現され、フランスの書類主義、官僚主義が戯画化されている。こうしたリアリズムを離れたシーンは、『スパニッシュ・アパートメント』ではさほど頻出しないが、その後の二作品では多用されている。従って観客は、常に物語の内容そのものとは異なるレベルに語り手あるいは作り手が存在することを意識させられる。また本作でもナレーションが繰り返し用いられるが、それは回想であるのか、それともその場の心情をナレーションで表現しているのかは明示的でない。やがて、留学を終えたグザヴィエはフランスへ戻って来る。しかし、当初の目的であった経済学を学びスペイン語を学んで有利なポストへ就職するという筋書きはあっさり捨て去られる。映画の最終盤で、グザヴィエはパソコンに向かい、L'auberge espagnoleすなわちこの映画の原題を打ち込んでいる。そして「自分は子供の頃本を書きたかったのだ」という回想が示される。映画は、グザヴィエが自らのスペインへの留学物語を本にしようと思いついた所で終わるのである。ラストシーンでは、再び飛行機が離陸する場面が示された後、グザヴィエ自身が滑走路で腕をひろげ「全てはそこから始まった Tout a commencé là.」とつぶやく。これはこの映画の最初のナレーションと同じ文句である。離陸のイメージは、スペイン留学の始まりでもあったし、これから書かれるはずの作品の始まりを表してもいる。それがL'auberge espagnoleという物語なのだ。こうして、『失われた時を求めて』を模した「始まりに至る物語」の形をもって映画は終わる。

すでに述べたようにこの映画には、続編、続々編が続く。それらの映画においては、上記の様な自己

言及的な描写がさらに強まり、グザヴィエの「書く行為」とそこから生まれる物語が映画と重ね合わされて行く。他の作品についての具体的な言及は次章以降に譲るが、第一作目においても、作品の中で作品自身の生成が示唆され、離陸というイメージによって結末が冒頭へと送り返されると共に新たな始まりを告げるという、いわば螺旋状の構造を成していることを確認しておきたい。

1-4：その他

本作品の内容として前面に出ているトピックと映画の構成面を見て来たが、その他にも注目すべき要素はある。例えば、主人公グザヴィエの両親は離婚しているが、父親はENA（フランス国立行政学院）出身のエリート、いわゆるエナルクであり、母親は映画の中で「ヒッピー」と呼ばれている自由人である。父親はほんの1シーンに登場するだけであり、父の友人ペラン氏の薦めでグザヴィエはスペインへの留学を決める。グザヴィエ自身が両親をないがしろにする訳ではないのだが、この映画には「家庭的」と呼ばれる様なシーンが登場しない。留学から帰国した後、母親と食事をするシーンがあるが、価値観の異なる母親にグザヴィエは何も語る気になれない。その後で、ペランの世話で決まった就職口も蹴ることになるのだから、グザヴィエは両親とは異なる生き方を選んだことになる。青年を主人公にした物語に於いてとりたてて特異なことではないが、本作でいわゆる「家庭的な光景」というものが描かれないことは、この後の二作の前に確認しておく価値がある。

また、EUの理想像を映し出すかのような彼らの「スパニッシュ・アパートメント」であるが、そこには極端なほど自国中心主義で他者に無神経な人間も欠けてはいない。ウェンディの実弟ウィリアムである。イギリスからやって来たこの少年は、偏見に満ちた口の減らないワルガキであるが、それでもグザヴィエたちは彼を受け入れて行く。そして、言わばフリーガンのカリカチュアであるこのウィリアムには、次の『ロシアン・ドールズ』で思いがけない役割が与えられることになる。

授業を受けた学生には、映画を見終わった後、ファーストインプレッションを書いてもらい、その後本稿筆者が映画の解説を行った後、再びアンケー

トや自由な感想を書いてもらった。予想されたことではあるが、スペインやベルギーの多言語状況への知識をあらかじめ持っていた者は少なく、解説を聞いた後でこの映画の内容に対する見方が変わった（単なる青春映画ではなく、文化的な背景が描かれているのは興味深い、など）と回答した学生が多かった。LGBTに関しては、学生からの反応は特に無かったが、設定年齢が学生たちに近いと、恋愛問題、性の問題を正面から扱っている本作品に考えさせられた、という反応があった。

また、ファーストインプレッションにおいて、この映画の構成について言及している学生はいなかったが、解説の後の感想では映画としても興味深い構成だという意見があった。

留学を通して複文化・複言語の世界を体験するグザヴィエの物語は、主人公が学生という同じ身分であるため、日本の学生たちにも理解しやすい内容と言えるだろう。EUの理想化された未来像に重ね合わされた感の強い本作であるが、グザヴィエの物語はさらに複雑なものへと変わって行く。

2：『ロシアン・ドールズ』⁶⁾

あらすじ

『スパニッシュ・アパートメント』から5年、物書きとなった30歳のグザヴィエは、ドラマの脚本やゴーストライターなどの仕事をこなしつつ、いつかは本格的な小説家になろうと夢見ているが、生活は不安定で、イザベルの世話になったりしながら何とかパリで暮らしている。元恋人マルティヌとの関係も続いているが、お互いにこれといったパートナーには出会っていない。そこにあのウィリアムがやって来る。そしてロシアのバレリーナと結婚するという。その後グザヴィエは、ロンドンに帰っていたウィリアムの姉ウェンディと深い関係になる。そして「スパニッシュ・アパートメント」の仲間たちは、ウィリアムの結婚を祝うためサンクトペテルブルグで再会を果たすことになる。

2-1：グローバリゼーションと恋愛

タイトルの『ロシアン・ドールズ』とは、いわゆるマトリョーシカを意味している。グザヴィエ、イザベル、そしてグザヴィエと別れたはずのマルティヌも「真実の愛」を求めて恋愛を繰り返すが、開けても開けてもまた別の人形が現れるのと同様、

彼らに「最後の人」は現れない。そんな彼らを尻目に「スパニッシュ・アパートメント」の問題児だったウィリアムは、ロンドンで公演中のロシアのバレリーナ、ナターシャに一目惚れ。互いに相手の言葉が分からない二人だが次第にその距離は縮まり、ナターシャは連絡先を残して帰国する。一年間必死でロシア語を勉強したウィリアムは彼女を訪ね、二人は結婚を決意する。そして、この話を彼がパリに来てグザヴィエに伝えたことをきっかけに、グザヴィエはウィリアムの姉ウエンディと仕事をするようになる。彼はドラマの脚本を英語で書く仕事を引き受け、共同執筆者を探していたのである。前作でもグザヴィエにとって気になる存在であったウエンディだが、今度こそ二人は恋に落ちる。

こうして、グザヴィエはパリとロンドンを行き来することになり、やがてウィリアムの結婚式の為に、かつての仲間と共にサンクトペテルブルグにやって来る。前作の物語が基本的にバルセロナという街で展開したのに対し、今回は様々な都市が舞台となり話題となる。それを象徴するのがイギリスとヨーロッパ大陸を結ぶユーロスター（ロンドンとリール、パリ、ブリュッセルなどを結ぶ高速鉄道）である。前作では、離陸する飛行機（飛躍、旅立ちを象徴する）が何度か画面に登場したのに対し、本作では疾走するユーロスターが何度も映し出される。グローバル化の高まりを受けて、人々は国境を越えて移動し、仕事をし、恋をするというわけである。グザヴィエがウエンディと仕事をするようになったのも、もともと彼がフランスのテレビ局で手がけたドラマの企画がBBCとの共同制作となったため、英語で脚本を書く必要があったからである。複言語・複文化主義を反映した前作とはやや趣を変えて、英語中心のグローバル化を感じさせるこうした筋書きは、国内にあっても様々な場面で英語の力に圧倒されるこの当時のフランス人の心象を反映したものであろうか。そして、前作では英語しか話せなかったウィリアムが、言葉の全く通じないバレリーナに一目惚れした後、「ロシア語を勉強するのに一年かかった」というセリフ一言でロシア語を話せる男に変身するのは、なんとも皮肉の効いた展開である。

2-2：家族の肖像，エコロジー問題

こうして彼らの恋愛を中心に描かれている本作で

あるが、ウィリアムの結婚に見られるように、家族の問題も浮上して来る。しかし、前作同様、本作での家族も心が通じ合わない存在として描かれる。ウエンディとウィリアム姉弟の両親はすでに離婚しており、息子の結婚式の場に来てさえ喧嘩が絶えない。グザヴィエの母親には新しいパートナーができるが、グザヴィエとはそりが合わない。また、祖父に、自分が生きている間に婚約者を連れて来てくれとせがまれたグザヴィエは、イザベルを婚約者にしたててひと芝居打つが、空しい結果に終わる。そしてマルティヌスは1児をつれた未婚の母である。こうした状況がフランス社会では珍しく無いことは言うまでもないが、敢えて「伝統的な家族の形」を描かないのも本三部作の特徴の一つと言えよう。

さらに、EUの価値観を前面に立てていた前作に対し、恋愛模様を中心にした本作ではポリテックなテーマは退いた感があるが、敢えて言えばエコロジーである。マルティヌスは、地球温暖化阻止の国際会議の為にブラジルに出かけて行くエコロジストである。エコロジー活動の広がりもまたグローバル化の現れの一つであると考えられるが、グザヴィエ自身は彼女の主張から距離をおいているように見えるし、第三作においてマルティヌスのキャラクターとして活かされることを除いては、ややとって付けた感のあるトピックではある。公開時に、本作は『スパニッシュ・アパートメント』の二番煎じだとか、二匹目のどじょうを狙ったものという批判もあったが、ストーリーの内容面で見るとこのようにやや弱い点があることも否定できず、そうした批判も無理からぬ所であろう。

2-3：書くこと，語ること

ストーリーの内容面がやや単調なのに対し、構成や形式的な面での表現が本作では目立っている。まず、前作が飛行機の離陸で始まったことを受けるかのようにユーロスターの疾走が映し出され、そして前作の最後にiMacに向かうグザヴィエがいたことを受けて、ユーロスター車内でノートパソコンを打つ（パソコンで書く）グザヴィエのシーンから、この映画は始まる。そして実は、この映画の物語は、全てこのファーストシーンのグザヴィエの回想である。回想はまずペテルブルグでの仲間たちのシーンを描き出すが、一旦それは中断され、そこに至る経緯が語られる。その中で、ウィリアムの恋やグザ

ヴィエの恋が語られ、改めて最初のペテルブルグのシーンが繰り返されて、当地でのウィリアムの結婚式とそこに集った仲間たちの様子が語られる。そして映画は最後に、ユーロスター内で回想を終わるグザヴィエへと戻って来るのである。こうしたプロットの構造がいわゆる入れ子構造となっており、「ロシアン・ドールズ」というタイトルと響き合っているのは言うまでもない。

そうした全体のスタイルを反映してか、今作では現実を描いている場面に、グザヴィエの妄想が入り込んだり、彼が書いている脚本の内容のショットが突然挿入されたりする。とりわけ彼が仕事関連で自分を売り込む場面で、話を大げさに誇張すると、笛などを吹きながらも一人のグザヴィエが現れたりする。しかし、こうしたことは単なる遊戯ではない。

すでに見たように、『スパニッシュ・アパートメント』も、全体としては、「始まりに至る物語」として構造化されており、映画の最後にグザヴィエが書いている物語こそが『スパニッシュ・アパートメント』なのであった。この続編では、物書きとなった彼が、ユーロスターの中でキーボードを叩いて語る物語が『ロシアン・ドールズ』ということになるが、その物語＝映画の中でもグザヴィエは常に何かの物語を書き続けている。それは、自分たちの体験に似た恋愛の物語であったり、ゴーストライターとして書く「他人の自伝」であったりする。まさに、書くことを巡る入れ子細工がここにも見て取れる。すなわち「書くこと、語ること」についてのメタレベルの表現が様々な形であからさまに現れているのであり、これが第一作と本作を隔てる大きな特徴である。

また上記とは違った意味でのメタレベルの「現れ」として、ウィリアムの披露宴の場面も興味深い。ここでは、かつての『スパニッシュ・アパートメント』の仲間たちが一言ずつ挨拶をするのだが、今回本作に出ずっぱりのグザヴィエ、イザベル、ウエンディ以外のメンバーは、ペテルブルグロケ以外には参加していない。従って、アレクサンドロらの単独ショットは、この挨拶のシーンだけである。そのせいか、彼らの挨拶はどことなく素の状態とも受け取れ、一種のドキュメンタリーのような効果を上げている。無論、それを狙ったのであろうし、旧交を暖める場面なので観客も共に旧作を振り返る心和むシーンであるが、フィクションと現実が重なり合ったような場面として興味深い。

この映画の最後では、冒頭に現れた、グザヴィエがその車中で回想を書いているユーロスターがロンドンのウォータール駅に入って来る。この映画でシャトルのように往復を繰り返していた列車、少なくとも画面上ではそのように描写されていたユーロスターだが、語りの現在に位置する列車は一つの方向へ走り続けて来たのである。往復運動は停止し、列車を降りたグザヴィエをウエンディが待っている。一作目と同様、冒頭に現れた乗り物がエンディングにも再び現れる。似た様な形式をとっているが、本作ではエンディングでのイメージが冒頭へと送り返される訳ではないし、「離陸＝旅立ち」ではなく、「到着」が描かれていることから、その意味合いは異なる。そして、我々はすでに作品がトリロジーとして存在している時点で位置しており、この到着が仮のものに過ぎないこと知っている。グザヴィエの物語は、まだ終着点を見出してはいないのである。

講義時間の都合上、本作は解説をしながらの鑑賞という形をとったため、聴講した学生にはやや分かりにくかったと思われる。印象に残ったテーマとしては、「結婚」、「言語を超越した愛」に加え、「マトリョーシカの比喩」、という答えもあった。また、ストーリーの内容に関心が集まり、やや詰めの甘い恋愛映画という感想が主であった。しかし、プロットの構成の意味合いなどと併せて考える時、つまり「映画」の在り方全体を捉えるとなかなか興味深い作品であり、そうした観点を適切に解説する工夫が必要であると感じられた。

3:『ニューヨークの巴里夫(パリジャン)』

あらすじ

『ロシアン・ドールズ』からさらに10年後、グザヴィエは40歳である。ウエンディとの間に、トムとミアという二人の子供もできた。幸福だった10年間だが、突如破局が訪れる。ウエンディがニューヨーク(以下NYと略す)出張の折にアメリカ人と恋に落ちたのだ。結局、彼女は二人の子供を連れてNYに移住し、グザヴィエもまた彼女たちを追ってNYへと向かう。すでにNYで暮らしていたイザベルとも再会し、彼女の新しいパートナーであるジューの斡旋で、グザヴィエはチャイナタウンでの暮らしを始める。アメリカへの永住権や親権の問題などに頭を悩ませながらも小説を書く仕事は続けていくグザ

ヴィエ。そこへ、マルティーンが出張でNYを訪れる。彼女はオーガニックな食品のビジネスに携わっている。やがて二人は男女の関係を復活させるが、グザヴィエの人生模様、その錯綜ぶりはまだまだ続く。

3-1：中国を意識したグローバリゼーション

バルセロナに始まったグザヴィエの物語の舞台は、ついにNYへと至る。しかも彼が暮らすのはチャイナタウン。近くの公園に集まって体操などを行っている中国の女性たちが何度も映し出される。本作のフランス語の原題は、*Casse-tête chinois*。「chinois中国の」という形容詞が含まれているが、全体で「難問」「頭を悩ませる複雑な問題」といった意味であり、ジグソーパズルという意味もある。イザベルの新しいパートナーであるジューも中国系であるし、マルティーンがビジネスで相手にするのも中国人たちだ。本作においてグザヴィエを取り巻く環境は、もはやEUではなく、本格的なグローバリゼーション、それも中国の影響を受け始めた世界のグローバリゼーションの中心NYである。

言語の問題においても表現はこれまでとは微妙に変化している。グザヴィエは勿論英語を話せるが、本場のアメリカではやはりネイティブに「劣等感」を抱かざるを得ない。また彼にとって中国語は他者の言語であり、本三部作では珍しく通訳を行う立場の人物が存在する。とは言え、マルティーンは中国語でビジネスのプレゼンテーションを行い、王之涣の五言絶句「登鶴鶴樓（鶴鶴樓に登る）」を吟じて交渉相手を唸らせる。従って、複言語・複文化主義的発想が失われた訳ではなく、世界を相手にするにはさらに歩を進める必要があるということになる。

面白いのは、グザヴィエが自転車でのメッセンジャー便の職を得る場面である。友人の紹介で、事務所を訪れたグザヴィエは、他の従業員から「外人 foreigner」扱いされる。ヒスパニック系の所長は、自分たちは言わば皆外人だと主張するが、なおも難癖をつける従業員はスペイン語でグザヴィエを侮辱する。それを聞いて、彼は即座にスペイン語で反撃し、スペイン語が共通言語であることを知った一同は笑いに包まれる。この一幕は、アメリカにヒスパニック系の住民が多いという事実や、グザヴィエの物語がそもそもバルセロナへの留学に始まったという三部作の歴史が、ここまではストーリーの外に置

かれているだけに、それらを一瞬にして思い出させてくれる点で一種のカタルシスがある。

3-2：愛と家族

これまでの二作でも多少描かれていたが、本作で本格的に問題になっているのが「家族」のテーマである。まず、冒頭のシーンからグザヴィエが二児の父親になっていることが示される。続いて、レズビアンであるイザベルとそのパートナーが自分たちの子供を欲しがっていることが語られ、その解決策としてグザヴィエが精子を提供し、体外受精が行われてイザベルが子供を生む。このことも原因となって、グザヴィエの家族は離ればなれとなる。次に、NYに落ち着くことにしたグザヴィエは、生活の為に中国人ナンシーと偽装結婚をすることになる。さらに、物語の後半ではマルティーンが二人の子供を連れてNYを訪れ、ある程度の親権を確保したグザヴィエが連れてくる子供たち、さらにはイザベルとその「家族」との交流を深める。そして、最後にはマルティーンがグザヴィエと共にNYに残る決断をする。従って、彼らと子供たちは、フランスで言う「再構成家族 famille recomposée」を形成することになる。

このように、いわゆる伝統的な家族の形態とは異なる家族の在り方が様々に現れ、それだけを取り上げればボレミックな主張が盛り込まれていると見える。しかしながら、上記の様な結果に至る過程には、個人の愛情の尊重が切実な問題として描かれている。それを象徴するのが、これまでほとんど登場することの無かったグザヴィエの父とグザヴィエが再会する場面である。グザヴィエとその両親は、三部作を通じて一貫して心の通い合わない親子として描かれて来たし、ここでも父と息子のコミュニケーションは空疎なものに終わる。しかし、グザヴィエは、若き日の父と母がその愛の記念にNYの歩道に刻んだイニシャルの話を聞く。父はそれとおぼしき場所で、二十歳のくだらない証だ、とつぶやき、二人はそれが時とともに消え去ったものと思ったが、それは誤りであった。父親はすでにその場所を忘れていたのであり、父と別れて一人になったグザヴィエは、そのイニシャルの刻印を別の場所で見つける。そして、父母の愛が長続きしなかったものであり、その思い出の場所さえ忘れられてしまったことを認識しながらも、彼らの愛情をそこに確かめ、自分が「望まれた子」であったことにグザヴィエは深く感

動する。いわゆるステレオタイプな家族像を否定し続ける一方、本作では特に親子の愛情や絆というのは強く肯定されており、そのことによって「家族」の意味合いを更新しようとする意志を感じることが出来る。

3-3：現在進行形の物語

三部作の一作目『スパニッシュ・アパートメント』は、同名の小説を書き始めることに到達する物語という構造をもっており、二作目の『ロシアン・ドールズ』は、彼が回想しながら列車内で書いている物語が、すなわち映画の物語であった。本作でも、ファーストカットからグザヴィエはパソコンに向かって何かを書いている。すぐに、その小説のタイトルが「Casse-tête chinois」つまりこの映画のタイトルだと判る。グザヴィエはNYに居るが始終パリの編集者とスカイプで連絡を取り、小説の進捗状況を報告する。それが、映画の進行と平行して行われるのだ。映画で語られていることは、編集者に報告されている内容でもあり、編集者はその内容に干渉したり、登場人物のセリフを批評したりする。そして、物語の終盤では、グザヴィエが書きかけのその小説を、登場人物の一人でもあるマルティヌに手渡し、彼女は喜怒哀楽を表しながらこれを読むことになる。このように、現在進行形の物語全体に対し、そのメタレベルが明らかに存在し、鑑賞者はそのことを意識せざるを得ない。全二作でも、部分的にそのような場面は存在したし、全体の構造においてグザヴィエの「書く行為」の主題化が明らかだったが、本作では、敢えてプロットの流れを遮る形でそうした「書く行為、語る行為」の前景化が行われている。そして最後に、グザヴィエは編集者からエンディングについて問われ、もしこれがハッピーエンディングだとして、それは小説においてなのか、現実においてなのか、と問われる。彼はそれに答えない。この物語の結末、あるいはグザヴィエ達の未来はまだどこにも存在していないのだ。ここにおいて、彼が書いている小説と映画における現実の区別は消失し、そのことによって作品は完結するのである。

さらに、「三部作」を意識した演出も明らかである。オープニングから、主要登場人物であるグザヴィエ、マルティヌ、イザベル、ウェンディらのタイトルバックには『スパニッシュ・アパートメント』、『ロ

シアン・ドールズ』と本作から取られた三つのカットが使われる。また、グザヴィエがNYにやってきた次の朝、イザベルの家のソファで目を覚ますシーンは、バルセロナの最初の朝のシーンと同じ構図によって繰り返される。そして、本作のハイライトの一つである、イザベルの浮気現場をジューに見つからないようグザヴィエが奮闘するシーンは、バルセロナでウェンディの浮気を皆でごまかしたシーンを明らかに参照している。

一方、三部作に一貫している「移動」のテーマ系では、一作目が飛行機、二作目がユーロスターと、国境を越えて行き来する高速の乗り物が強調されて来たが、本作では地上あるいは地下の日常的な乗り物が繰り返し現れており、前二作との違いを見て取れる。それは、タクシーであり、自転車であり、地下鉄である。いずれも、渋滞、悪路、混雑といった日常の不自由に取り込まれており、移動に伴う高揚感はない。それは、この映画の物語内容に現れている、青春の喪失、人生の迷走、明日の模索といったテーマとどこか重なり合う。

こうして、物語の内容だけでなく、構成や演出における「映画としての表現の在り方」をはっきりと見せながら三部作は続いて来た。我々は、その最後を飾る本作にも、そのことをしっかりと確認出来るのである。

学生たちのアンケートによれば、前二作同様、登場人物たちの国籍の多様性がまず感じられ、特に本作は中国人が含まれることによって、世界の様々な要素が表現されているという点が印象的だったようである。そして、体外受精や家族の在り方への関心も高かった。複雑な人間関係や多様な家族の形について少し身近に感じた、という感想もあった。LGBTやマイノリティについても、こうした映画を通じて議論がオープンになれば良いという声もあった。全体としては、グザヴィエの恋の行方、人生の選択、といった点がドラマティックであるため、初見の鑑賞者の関心がそこに集まるのは当然であるが、映画の構成や演出に言及がなかったのはやや残念であった。

おわりに

我々は、グザヴィエという男を主人公として2002、2005、2013というそれぞれの年に制作された

三部作を急ぎ足で見て来た。物語の内容としては、「フランス人目線によるグローバル世界の中の自己認識」を表現したトリロジーと考えることができるだろう。そこには、言語をめぐる相互文化交流の問題から、恋愛や性、アイデンティティ、そして家族の在り方など様々な問題が含まれ、それぞれの問題系が、多様で混沌とした現実の中でいくつかの形で描き出されている。グザヴィエという人物の25歳から40歳にかけての人生の迷走を通して、見ている方も様々な経験をしたような気分になるのは本講義の受講生ばかりではないだろう。

そして、現実のヨーロッパに眼を移せば、まさにカタルーニャが独立問題に揺れており、イギリスのEU離脱も現実となった。何も、この三部作が予言的な作品だったと主張する訳ではないが、全くの偶然とも言い切れない。また、グザヴィエとマルティヌはフランス人同士のカップルであり、同国人同士に閉じたとも、元の鞘に戻ったとも言える。しかし、この「再構成された」家族はフランスへ戻ることを選んだ訳ではなく、今後もグローバルな社会の中で生き方を模索し続けるだろう。それが、最後のエンドロールに挿入された登場人物たちの街頭行進の意味であると思われる。グザヴィエの物語は、「多様性における統一」を掲げるEUの一員としてのフランス人の問題から、グローバル化した世界の中で生き延びる術を模索する一人のフランス人の問題へと移って行ったと言えるだろうか。とは言え、宗教やそれをめぐる諸問題が明らかに欠落していること、また、主要な登場人物がほぼ白人のみであること、そして「スペイン」「ロシア」「中国」という単語をそれぞれのタイトルに含みながらも、結局はフランスを中心とした大西洋の両岸ではほぼ物語が展開していることなど、数々の限界も指摘できる。そうしたことも含め、様々なことを考えるきっかけを与えてくれる三部作と言えよう。

そしてまた、これらの作品をその物語内容だけで受け止めるのではなく、形式や構成も含めた「映画」作品として捉えるべきというのが本稿の立場である。すでに見て来たように、本三部作は三作品とも、グザヴィエの「書く行為、語る行為」を表現した映画でもある。物語内容を語る一連のシーンを遮って現れるメタレベルのシーンは、しばしば特撮やアニメーションなどを伴っており、お遊びととられかねないシーンでもある。しかし、グザヴィエの「書く

行為、語る行為」の表象は、物語の流れを遮って現れるものに留まらず、オープニングやエンディングでもしっかりと繰り返し表現されており、明らかに細部ではない。

今回の連続講義の試みによって、これら三部作の物語内容としては、十分学生の関心をひくことが明らかになった。そして、背景などの解説によって理解がより深まることも確認されたと言える。映画を通して表現されている「書く行為、語る行為」への参照、すなわち映画が示すメタレベルに関しては、なかなか学生に意識されないことも明らかになった。これを積極的に捉えれば、映画作品の解釈について、物語内容だけにとらわれず、表現の形式や構成・構造の意味を考える為の良い例を得たということになる。今回、我々が取り上げたこの三部作は、幅広い観点から見て興味深い、言い換えれば、取り上げ方次第で様々な考察の対象となりうる作品だと考える。

¹ Trilogie de Cédric Klapisch (https://fr.wikipedia.org/wiki/Trilogie_de_Cédric_Klapisch最終閲覧2017年11月27日) 日本では「青春三部作」と呼ばれているが、同頁の日本語版は存在していない。

² 本稿執筆時現在(2017年11月)、スペインではカタロニア州の独立を巡って大きな混乱が続いており、今後の展開において予断を許さない状況である。

³ 複言語・複文化主義の理論的な詳細については下記の文献が参考となる。

細川英雄・西山教行編『複言語・複文化主義とは何か』、くろしお出版、2010

マイケル・バイラム著、細川英雄監修『相互文化的能力を育む外国語教育』、大修館書店、2015

⁴ 本講義は、2017年11月3日および4日に「卒業研究プレゼミ」の一環として行った。受講者は、3日が5名、4日は2名であった。

⁶ 川上茂信「スペインにおける言語状況と言語教育」、平成18-20年度科学研究費補助金「拡大EU諸国における外国語教育政策とその実効性に関する総合的研究」研究成果報告書、pp.211-224、2009

⁶ 今回の講義では、時間の都合上、『ロシアン・ドールズ』については解説を行いながら幾つかのシーンのみを見てもらう形をとった。

使用DVD

セドリック・クラピッシュ『スパニッシュ・アパートメント』, 20世紀フォックスホームエンターテイメント, 2010

セドリック・クラピッシュ『ロシアン・ドールズ』, 角川映画, 2010

セドリック・クラピッシュ『ニューヨークのバリ夫パリジャン』, オデッサ・エンターテインメント, 2013

その他の参考文献

朝比奈美知子・横山安由美編著『フランス文化55のキーワード』, ミネルヴァ書房, 2011

OECD教育研究革新センター編著, 本名信行監訳『グローバル化と言語能力 自己と他者, そして世界をどうみるか』, 明石書店2015

マイケル・ライアン, メリッサ・レノス著, 田畑暁生訳『Film Analysis 映画分析入門』, フィルムアート社, 2014

Summary

In order to help our students to understand and realize the values of intercultural communication, we carried out intensive courses analysing the French films known as the "trilogy of Cedric Klapisch (*L'Auberge Espagnole*, *Les Poupées russes*, *Casse-tête chinois*)". We consider this trilogy not only as examples of the tough situation of France or French communities in globalization, but also as good texts for film studies. By reflecting on our courses, we will look for more effective approaches that will help our students to appreciate the films as well composed works.

Key Words : intercultural communication, plurilingualism, pluriculturalism, globalization, identity, gender, EU, film studies, representation

(Received November 27, 2017)